

# 刊行にあたって

超高齢社会が急速に進行している日本では、健康に対する関心が年々高まりをみせています。とくに食に対する関心は“生”への根源的なものであることから、食材のみならず、これを咀嚼する口腔機能にまで関心が及び、咀嚼機能に携わる歯科医療の果たす役割は大きなものとなっています。歯科においては、インプラント治療が全盛の昨今ですが、高齢者特有の疾患や年金などさまざまな問題から無歯顎者の咀嚼機能の回復に対する現実的な方策としては義歯治療が主体になると考えます。

そこで筆者は、2020年12月に前著『リンゴ丸かじりができるImai Method Complete Denture 片側性・両側性咬合平衡に深く配慮した全部床義歯』を上梓しました。全部床義歯の基本技術を突き詰め、製作に関するさまざまな要素を力学的に再確認するプロセスのもと、“痛い、外れる、噛めない”原因をトップダウンで考え、解消する力学的な手順を製作法とする“違和感のない、外れにくい、噛める、飲み込める今井メソッドデンチャー”（通称：すっぽんデンチャー）の紹介です。義歯の安定を力学的に追究して製作する全部床義歯です。力学的な考え方に基づく製作法によって、義歯は脱離しにくいことからリンゴ丸かじりができるため注目を集め、思いのほか高評価をいただきました。

あれから5年。いまだに「全部床義歯は難しい」との声を目にします。さまざまなデジタル機器が進化、発展、汎用化した現在、歯科医師はそれらに目を奪われ、基本技術や製作法に疑問の声が上がることもなく、むしろ蔑ろになってはいないでしょうか？最近はやりの3次元プリント有床義歯（デジタル義歯）といえども、安定する全部床義歯の製作には粘膜面の被圧変位や粘弾性等の性状を考慮した抵抗が生じる印象が必要になります。つまり、抵抗が生じる粘膜面の設定と印象のためにアナログ的な対応による印象法が必要であることを忘れてはいけません。そんな現状を鑑み、筆者は臨床経験40年の集大成として『安定義歯（すっぽんデンチャー）<sup>®</sup>』（「すっぽんデンチャー<sup>®</sup>」、「リンゴ丸かじりデンチャー<sup>®</sup>」と併せて商標登録済み）をこのたび上梓しました。術者の技術を積み重ねる力学的な手法の製作手順に一工夫加えるだけで咀嚼時に安定する全部床義歯が製作できる製作法の開発です。基本技術の習得と力学的な手順に拘る製作法です。従来の“すっぽんデンチャー”の改訂版ともいえます。“抵抗は適切な接触状態の面に生じるため、義歯床に必要な抵抗は適切な印象によって生じる”ことを理解したうえでの製作法です。そのためには、力学と抵抗を追究する過程が重要になります。

“すっぽんデンチャー<sup>®</sup>”とは、咀嚼・嚥下に重要な舌、および咬合（荷重）による力学と、義歯床に生じる支持・把持・維持の抵抗する作用や状態に深く配慮して製作された全部床義歯、つまり“安定義歯”のことです。咀嚼時に外れにくいから、安心して食品を選ぶことなく噛めることから、名称は患者が覚えやすく忘れにくい表現としています。安定義歯の“力学理論に基づく製作法”とは、全部床義歯が安定する状態の粘膜面を、機能時の粘膜面の性状や状態の考慮を前提に義歯の安定時の力学と抵抗（科学的な根拠）に基づいて設定する基本的な手順を“力学理論”として、これに基づく製作（印象）法のことです。匠の経験や技能を、科学的な理論によって技術に置き換えた製作法といえます。科学的な裏付けのある再現性を重視した製作法であるため、指針どおりの手順による製作が要求されます。

咬合時の義歯床による圧力（応力）の粘膜下組織への適切な伝播を重視するため、部位によって異なる粘膜面の性状や状態の考慮を前提として、安定時の粘膜面の「抵抗する状態」を追究して印象する製法になります。

本書では以下に示すように、基本となる「安定義歯」の製法」と、この製法を応用した少数本埋入のインプラント上の義歯など「オーバーデンチャー」の製法について詳細に解説していきます。「安定義歯」の製法は、科学で考えているため汎用性の高い製法といえます。

#### ●「安定義歯（すっぽんデンチャー）」の製法：「全部床義歯の力学的印象法」の開発

1. 安定して機能する全部床義歯（安定義歯）の再現性ある製作のための粘膜面の設定法（設定に必要な科学的な「力学理論」の構築〔理論編〕）と印象法の開発〔応用編〕。
2. 「安定義歯（すっぽんデンチャー）<sup>®</sup>」を無理なく製作できるように指針となる「力学理論」に基づく製法（力学的印象法）と臨床における手技の開発〔臨床編〕。

#### ●「安定義歯」の臨床応用：「オーバーデンチャーの力学的製法」の開発

オーバーデンチャーは、顎堤粘膜上のアバットメントや残根が支点となるためガタつきやすい。〔安定義歯の臨床応用〕として、少数本埋入のIOD（インプラントオーバーデンチャー、上下顎2IOD等）や残根上義歯の安定のために、義歯床の「支持優先の力学理論」から支点の支持をおもに見直す手法によって抵抗が生じる（抵抗する状態となる）粘膜負担義歯を製作する「オーバーデンチャーの力学的製法」の開発を行う。

リング丸かじりが普通にできる「安定義歯」を多数製作して思うことは、全部床義歯装着者が最も難しい前歯部咀嚼を例に力学で考えると、支点となる前歯部を主とする顎堤の形態や状態と同等以上に、作用点となる口蓋の形態や状態、および下顎の舌小帯周囲環境に対する配慮の重要性です。製作時に沈下と離脱に対する抵抗の十分な配慮によって、顎堤吸収の著しい症例でも「吸いつき」や「リング丸かじり」などが可能なことを筆者は多数経験しています。しかし、難易度の判定において日本補綴歯科学会の症型分類では、作用点に対してはまったく行っていません。全部床義歯の安定は力学に支配されるため、支点となる顎堤だけではなく作用点への配慮も行ってほしいと切に願います。

最後になりますが、「安定してリング丸かじりの連続咀嚼ができる全部床義歯」と「安全安心の少数本埋入のIODを主とするオーバーデンチャー」の製作のための技術開発、および歯科医師や歯科技工士の技術向上のために講習や指導を主たる目的とする「すっぽんデンチャー（安定義歯）研究会」を紹介します。当会は、実技を通じた講習だけではなく、確実な製法の習得のために達成の程度によって評価基準に基づく認定制度（本書「topics」：332頁参照）がありますので、ぜひご参加いただければ幸いです。

2026年3月  
今井守夫